

白川学と『万葉集』

真 下 厚

はじめに

白川静には、『万葉集』についての著書『初期万葉論』・『後期万葉論』二冊がある。白川は中国古代文学・文字学・文化学の研究を専門とするが、これらの書物は決して余技として書かれたものではない。『万葉集』は白川にとって、白川学にとって大きな意味をもつものがあった。

本稿はそれを白川の生い立ちからたどり、白川学の形成に果たした役割などについて論じるものである。

一 『万葉集』との出会い

白川は明治四十三年（一九一〇）四月、福井市に生まれた。順化小学校時代には、夏休みの早起会で生家から二キロほど離れた足羽山麓の藤島神社まで出かけて近くにある橘曙覧の旧跡を知り、人々に広く語り伝えられていた曙覧の人となりについてのエピソードを聞いたという¹⁾。曙覧は幕末の国学者にして歌人、万葉調の和歌を詠んでいた。

ここに白川の、『万葉集』との最初の出会いがあった。その後、大阪に出てから交流を続けてきた故郷の先輩佐々木文苑の詠歌にも曙覧の万葉調の影響を見出している²⁾。このように、郷里の福井には当時、曙覧の歌を通して『万葉集』を身近に感じる文化的土壌が存していたのである。

白川は昭和三年（一九二八）、中学の教師となることを決意して京阪商業学校に編入学した。白川はその頃を回想して次のように述べている。

当時の私には、東洋的な生きかたとは何かということが主題であった。……私の視点は、次第に東アジアの古代、その古典古代ともいうべきものに、焦点を向けるようになった。そこには『詩経』と『万葉集』とがあった³⁾。

この時期以前、白川は大阪に出て働いた広瀬徳蔵法律事務所において広瀬が蔵していた漢詩を中心とする漢籍を数多く読んだという。その読書遍歴のなかで、『詩経』と『万葉集』との、ふしぎな協奏が、私の中で生まれはじめていた」と述べるように、『詩経』、そして『万

葉集』への関心が芽生えたのである。そして、それが思想的に明確に自覚され、意義づけられたのが先の京阪商業時代のことだったということになる。

白川は京阪商業卒業後のことについて次のように述べている。

早くから『詩経』と『万葉』とを第一段階の読書目標としていたので、『万葉』については、まずわが国の短歌史的概観を得ておく必要がある。それで昭和六年、改造社から出た『短歌講座』十二巻を求め、一通り読んだ。万葉関係のものは、いくらか念を入れて読んだ。……特に印象に残ったのは、アララギが唾棄してやまない大伴家持の歌について、その新鮮な抒情を指摘された小泉菱三氏の家持論であった⁽⁴⁾。

『短歌講座』全十二巻は改造社から同社編として昭和六年（一九三一）から昭和七年（一九三二）にかけて刊行された。各巻の内容は「歌史歌体篇」「作法書式篇」「名歌鑑賞篇」「概論解説篇」「撰集講義篇」「家集講話篇」「歌人評伝篇」「女流歌人篇」「修辞文法篇」「特殊研究篇上巻」「特殊研究篇 下巻」「現代結社篇」というものである。白川が印象に残ったという小泉菱三の大伴家持論はこの第七巻「歌人評伝篇」に収められていた。

『アララギ』は正岡子規門下の歌人たちが創始した短歌雑誌『馬酔木』の後を承けて発刊された雑誌で、その結社に属した歌人たちのグループをアララギ派と呼んでいる。このアララギ派は『アララギ』誌上において万葉歌の合同批評を連載し、歌人たちの作歌の道しるべとしていた。そうしたなかで、『アララギ』の編集を担うことになった島木

赤彦は大正十四年（一九二五）十一月、万葉歌についての評論・研究として『萬葉集の鑑賞及び其批評』を岩波書店から刊行した。この書において、島木は『万葉集』の歌の時期区分を「初期」「中期」「末期」の三時期に分け、家持の歌は最後の「末期」に入れている。その批評は次のようなものである。たとえば、天平十五年秋八月の「大伴宿家持秋歌三首」のうちの一首、

秋の野に咲ける秋萩秋風になびける上に秋の露置けり（八・一五九七）

について、「各句に秋といふ文字を豊んで歌を作つて見たに過ぎぬものであつて、秋といふ文字を疊んだために、何等秋の野の情趣を現すといふことなく、却つて、文字の上の遊戯感が目立つて輕薄にさへ思はれる。歌を甑弄する端緒が斯様なものから發せられるといふ感がする」と述べている。まさに酷評というべきもので、島木が万葉集最後の時期を「後期」とせず、「末期」とした理由もこのあたりにあろう。こうしたアララギ派の家持評価の一方で、大正期には家持の歌を評価しようとする動きも現れてくる⁽⁵⁾。その研究者の一人が小泉菱三であった。

小泉は歌人として大正十一年（一九二二）にはポトナム短歌会を創設し、機関誌『ポトナム』を発刊した。そして、大正十五年（一九二六）五月には万葉歌の研究書として東京の修文館より『評釈大伴家持全集』を刊行している。

そのなかで、先の一五九七番歌については、
あの顔韻が先づ耳につく。次ににの脚韻に氣がつく。軽い興味中

心の歌である。彼の様な線の細い作歌は、かうした試みには不向きである。これなどもうはすべりした失敗の作といへよう。しかし彼としては相當にいつてるつもりなのであらう。

と述べ、やはり否定的な評価を下している。しかし、小泉はこの歌のすぐ前で

あしひきの山辺に居ればほととぎす木の問立ち潜き鳴かぬ日はなし(十七・三九一一)

を取り上げ、「三首(引用者注) 家持が弟書持にこのとき送った歌三首をいう)のうちこの歌最も實感的で勝ぐれてゐる。一氣に歌ひあげて結句「鳴かぬ日はなし」と言ひ放してゐるところ、つき放したやうでゐて深い愛着がこもつてゐる。」と評価し、これに対して「他の二首は技巧に落ちてゐる。家持の作はどうも技巧に骨を折りすぎて失敗してゐるのが多い。」とするが、それに続けて「この點は彼が萬葉最後期の作家として、古今集への推移の第一歩に立つてゐることを語つてゐるものと見られよう。而かも彼のこの傾向をば時代精神の流を背景とせずして評價することは、あまりに酷ではなからうか。」と述べてその文学史的な位置づけを踏まえた上で歌を評価しようとするのであった。

昭和二年(一九二七)四月、立命館大学専門学部に文学科国語漢文科が新設され、小泉はその教授であつた。⁶⁾ 白川は昭和八年(一九三三)四月、夜間部として開設されていた専門部文学科国漢科に入学してその小泉と出会うことになつたのであつた。こうした小泉との出会い、そしてその指導を通して万葉集への研究の思いはいっそう強まつて

いったものと思われる。

昭和五十四年(一九七九)に中央公論社から刊行された白川の著書『初期万葉論』の「あとがき」で次のように述べている。

万葉についての考説を試みることは、私の素顔の一つである。はじめに中国の古代文学に志したのも、そのことを準備する心づもりからであつたが、久しく流連して帰らぬうちに歳月も過ぎて、すでに遅暮の感が深い。しかしその素顔を忘れていたわけではなく、数年前に中公新書の一冊として書いた『詩経』は、いわば中国文学の立場からみた万葉についての、私の素描を試みたものであつた。

白川はここで、自分にとって中国古代文学の研究は万葉研究の準備のためであつたと述べるが、なぜそのような迂遠な道をたどろうとしたのであろうか。

昭和四十五年(一九七〇)、「中国文学の立場からみた万葉」⁷⁾論という中公新書『詩経中国の古代歌謡』を刊行した二年後のある日、白川が次のように言う場面に筆者は立ち会つた。それは筆者が立命館大学文学部文学科日本文学専攻三年次に編入学し、白川が担当する講義科目「中国文学史I」を受講していたときのことである。六月頃のことであつたかと思うが、どんな話の流れだったかは思い出すことができない。白川はふと、「ぼくははじめ『万葉集』の研究がやりたかつたんです」と言い、「しかし、ぼくはその頃貧しかったので、書物が買えなかつたんです。だから、古代中国の漢字の研究に進むことになつたんです」と語つた。そのことばは万葉研究を志して立命館大学に編入学してきた筆者の胸に強く響いたのであつた。

近代の万葉集研究は国文学の文献学的研究において最も早く着手され、そして最も進展していたのである。

その牽引者となったのは歌人・国文学者の佐佐木信綱であった。佐佐木は万葉集研究の基礎を築くべく、古写本を収集して「萬葉集の定本をつくり、かつ完全なる改訂本萬葉を作らむことを希望す。」⁸⁾としてまず古写本の本文を校合し、大正十三年（一九二四）から十四年（一九二五）にかけて校本万葉集刊行会から刊行された『校本萬葉集』全二十巻編纂の中心的役割を担った。それとともに収集した古写本の複製本刊行を行った。それまで寺院、宮家や公家、有力な武家たちによって蔵されてきた万葉集の貴重な古写本は、それを閲覧して伝本調査を行うことが容易ではなかった。佐佐木は自ら収集した古写本を中心に複製本を制作して刊行することで研究者たちの本文研究に広く役立てようとしたのである。大正十三年には「金沢本万葉集」、十四年には「元暦万葉集 有栖川王府本」、十五年（一九二六）には「天治本万葉集」、昭和三年（一九二八）には現存最古の写本である「桂本万葉集」などの次点本、そして白川が立命館大学専門部に入学した昭和八年にはその当時『万葉集』全二十巻の揃った新点本系統の最古本である「西本願寺本万葉集」の複製本が刊行された。

これら複製本は本物の古写本に比べれば格段に安価なものではあったが、一般の人々にとっては非常に高価な書物であった。このような本文研究の資料を揃えて万葉研究に向かおうとするのは富裕な出身の子弟でなければとうてい無理なことだったであろう。

加えて、訓詁・注釈研究の資料である。万葉集の訓詁・注釈の研究

は、まとまったものとしては古く鎌倉時代の仙覚にまでさかのぼるが、近世には契沖や荷田春満・信名、賀茂真淵、鹿持雅澄などの国学者や北村季吟のような歌人たちが万葉集の注釈研究を行っている。さらに、明治時代以降も幾種類かの注釈書が刊行されていた。⁹⁾そうしたすべての書物を探求して手もとに置こうとするのは多大な時間的・経済的な負担を要することだったであろう。

昭和十年（一九三五）前後の万葉研究はそのような状況にあったのである。

もっとも、先の理由は『詩経 中国の古代歌謡』を刊行し、おそらく『初期万葉論』を構想しようかとしていた時に若き日を回顧して学生たちに漏らしたことばである。学生時代当時、白川が中国古代文学・文字学の研究に進むようになったのには、実際はさまざまな事情も存していたことであろう。それが数十年後に回顧して学生たちに対して時、わかりやすく一つにして語ったものだったかと思われる。とはいえ、先のこと万葉研究をそのまま進めなかったことの理由の一つであったことは確かであり、それには当時の万葉研究のこうした状況も関わっていたのである。

二 二冊の万葉研究書

白川は昭和四十五年（一九七〇）六月、中公新書『詩経 中国の古代歌謡』を刊行した。六十歳の時である。この書は『詩経』の詩篇について『万葉集』の歌と比較して論じたものであった。中国古代の『詩経』詩篇と日本古代の『万葉集』の歌という、直接的な影響関係を持

たず、国・地域も時代も異なる詩歌を比較する論が立てられるようなことはそれまでにはなかった。白川にとって、若き日の思いがここにかたちを成したのである。白川はこれらの詩歌に古代的宗教的な民俗の共通性を見出していた。とはいえ、後述するように、昭和三十五年（一九六〇）に立命館大学文学部中国文学研究室より刊行され、昭和三十七年（一九六二）に博士論文として京都大学に提出された『興の研究（稿本詩経研究別冊）』では『万葉集』など日本古代文学との比較はきわめて慎重に避けられていた。しかし、ここに、白川はその思いに向かつて大きく足を踏み出したのである。

昭和四十八年（一九七三）、おそらくこの書の刊行を承けてのことであろう、白川は『万葉集講座』第二巻「思想と背景」（有精堂出版、五月）に「万葉集と中国思想」、『講座比較文学』第一巻「世界の中の日本文学」（東京大学出版会、六月）に「古代歌謡の世界―『詩経』と『万葉集』―」という二本の論文を寄稿している。

そして、その六年後の昭和五十四年（一九七九）四月二十五日、白川六十九歳の時に『万葉集』についての最初の著書『初期万葉論』が中央公論社より刊行された。白川はこの書において、主として奈良時代より前の時期の万葉歌について中国古代の『詩経』など呪的な詩篇の世界との比較を中心に論じている。『詩経 中国の古代歌謡』では詩篇を対象として万葉歌との比較を踏まえて論じたが、この書はそれと好対照を成すものといつてよいであろう。

この書の書名の「初期万葉」について、白川は次のようにいう。

初期万葉は、呪歌の伝統の中から、定型としての短歌が成立し、

長歌・旋頭歌も一の形式として成立した時期で、『万葉』の精華はほぼこの時期にあるといつてよい。古代的な発想法や修辭が、みごとな完成度を示した時期であった。中国詩文の直接的な影響は極めて希薄であったと思われ、古代朝鮮からの渡来者たちの学術・文化・習俗が、その生活を通じて、修辭や表記法の上にも大きな影響を与えている。¹⁰⁾

白川は、「初期万葉」とは歌の形式が成立して古代的な発想法・修辭が完成度を示し、古代朝鮮からの渡来者たちの文化的な影響が強かった時期とする。

ところで、従来の万葉研究では「初期万葉」という用語は万葉時代四期区分のうちの第一期（壬申の乱まで）を指すとするのが一般的であり、歴史的な事象と関わる歌人と歌の世界として捉えられたり、歌謡から和歌への転換期として捉えられたりしてきた。

しかし、白川は「呪歌の伝統」として第二期（奈良遷都まで）に属するとされる柿本人麻呂の歌を取り上げ、「叙景歌の成立」として第三期（天平五年（七三三）まで）に属するとされる山部赤人の歌をも論じる。第一期、第二期の歌を主たる対象としたものであり、また次の書『後期万葉論』との対比からすれば「前期万葉」という用語も想起されるが、この書は年代によって分割する一般的な時期区分によるものではない。歌の形式や発想・表現が成立し、高度化してゆく過程を論じるものであるから、それはやはり「初期万葉」でなくてはならなかったのである。

平成七年（一九九五）三月二十五日、『後期万葉論』が中央公論社

より刊行された。先の書から十五年後、白川八十四歳の時である。この書は『初期万葉論』と異なって、万葉歌人たちがあこがれた中国六朝文学や六朝文化と直接的に比較したものである。

筆者は、白川が『初期万葉論』を刊行した直後の昭和五十四年六月頃のことであったが、白川と面談する機会を得て次のようなことばを聞いた。

ぼくの本命は「後期万葉論」なんですよ。

『初期万葉論』の次に着手するのは「後期万葉論」だという宣言であり、その時すでに『後期万葉論』という書名は定まっていたということである。だが、この時白川が言った「本命」ということばはどのような意味なのであろうか。

二つのことが考えられよう。

一つは、この論で考究される対象が中国六朝文学に学んだ奈良朝貴族たちの文学だということである。白川は『後期万葉論』において「後期の『万葉』は、旅人・憶良・家持など、中国の詩文に接し、その影響を受けた人たちの文学で、人麻呂を中心とする初期の作歌と截然とした区別がある。」と述べている。このような文学について考究することは中国文学を長年研究してきた自分にとってまさに「本命」のテーマであり、これを中国文学の側から照射・比較して明らかにしてゆかねばならないであろう。

他の一つは、恩師小泉三への思いであろう。白川は『後期万葉論』の「あとがき」に次のように記している。

この書を、どうしても今年書きあげたいと思った事情としては、

私の歌の師である小泉三先生が、本年生誕百年にあたり、『ポトナム』ではその記念号（通巻八一六号）が出された。先生にははやく『評釈大伴家持全集』（大正一五年刊）があり、先生の万葉集の講義を受けた私には、後期万葉について特別の関心もあって、この書をその記念号したいという氣持があったからである。

ここにいう「後期万葉について特別の関心」とは中国六朝文学の影響を受けた奈良朝貴族の文学への中国文学の側からの照射・比較であろう。また、「私の歌の師である小泉三先生が、本年生誕百年にあたり」「先生の万葉集の講義を受けた私には」「この書をその記念号したい」には師への思いがこもっている。小泉が見出した家持歌の世界、後期万葉の世界を論じることこそがその教えを受けた自分にとっての万葉研究の「本命」のテーマだという思いだったのでなからうか。

このようにして執筆された二冊の万葉研究書について、その内容にいくらか触れておこう。

まず、その『後期万葉論』についてである。その構成は、第一章「分期について」、第二章「七夕の歌」、第三章「表記法について」、第四章「仮合即離の境涯」、第五章「旅人讀酒」、第六章「家持の軌迹」、第七章「底辺の歌」から成る。

第一章「分期について」は自身が立てた「初期万葉」「後期万葉」という時期区分の考え方を万葉研究史のなかで位置づけようとしたもの、また第二章「七夕の歌」は「初期万葉」の七夕歌に古代朝鮮からの渡来人たちの文化的影響がみられ、「後期万葉」の七夕歌とは異なると論じたもの、第三章「表記法について」は万葉研究の重要な問題

の一つである歌の表記について中国文学の立場から論じたもの。『文選』のなかの「無乏」について、

李善も文字を決しかね、五臣本には定の字として解釈を試みているが、それを「乏しき無きの源より」とよみ、「盡きせず起る意」とよみとくことは、そう簡単になしうることでなく、人麻呂やその周囲の人が、知らなかったはずがないというほど、一般的な用語であつたとは思われない。

というような中国文学の側からの重い指摘は、万葉研究者として心して聞かねばなるまいと思うところである。

第四章から第六章までが歌人論で、第四章「仮合即離の境涯」は山上憶良論、第五章「旅人讃酒」は大伴旅人論、第六章「家持の軌迹」は大伴家持論である。なお、第七章「底辺の歌」では東歌と防人歌が取り上げられている。

さて、先のような指摘は憶良論においてもみられる。「一般に、人麻呂・憶良・旅人・家持らの作品については、中国に典故を求める傾向が多すぎるように思う。」と述べた後、「貧窮問答歌」についての陶淵明「飲酒二十首」を典故とする説を取り上げて、次のようにいう。

陶淵明のこの詩は『文選』にも入らず、おそらく当時の万葉人の視野に入ることもなかったであろう。また陶淵明のいう貧士の觀念が、ここにいう貧窮者と同じとしてよいか、そこにも疑問がある。それは秦漢以来、数百年にわたって形成されてきた士人の社会が、貴族的門閥、武装集団である軍閥社会の中に蹂躪されてゆく、その敗北感の中から生まれてきた貧士の意識と、律令社会の未成熟のゆ

えに古代的隷属の中から生まれてくる貧窮者の間には、歴史的なその存在性格の上に、基本的な相違があるからである。ただ「しかとあらぬ 鬚かき撫でて 吾をおきて 人はあらじ」という自画像的な描写のうちには、貧窮者ではない貧士の姿がみえる。

貧窮が社会的不公平の結果として生まれる場合、その批判として文学的手段に訴えるとき、それは社会詩となる。しかしこの詩には、そのような社会的要因についてふれるところがない。その是正のための提言もない。社会詩は必然に政治詩を生み、また思想詩・道德詩を生む。中国の『詩経』、その大小二雅は貴族社会の詩であるが、そこには社会詩もあり、政治詩もあり、思想詩・道德詩もあつた。『万葉』の中で、もし社会詩的なものがあるとすれば、おそらくこの一篇をあげうるに過ぎないのではないか。『万葉』がいわば唯心論的な觀念の世界にとどまって、そこから大きく歌の世界を拡大することができなかつたのは、一言にしていえば、その社会が未成熟のまま、律令制を發展することができず、社会的な展開を遂げることができなかつた、その停滞性のうちにあつたのではないか。そのことがまた、憶良の文学に限界を与えるものであつたように思う。(傍線は引用者による。)

白川は、今日の万葉研究者たちが中国古典のなかに典故を求め、万葉びとがそれを読み得たか否かの検討なしに、安易に関係づけてしまいがちになることに注意を促す。これは先の指摘と共通するが、ここではさらに傍線部のように表現の背後にある思想性の中国と日本の相違について凝縮したことで述べ、憶良文学の限界を説く。こうし

た批評は中国文学研究の深い学識にもとづくもので、すぐれて重厚かつ斬新な見解であった。

続いて、『初期万葉論』を取り上げよう。その構成は、第一章「比較文学の方法」、第二章「巻頭の歌」、第三章「呪歌の伝統」、第四章「叙景歌の成立」、第五章「挽歌の系譜」、第六章「万葉の軌跡」から成る。白川の独創的な考えは第二章「巻頭の歌」において最もよく示されている。

ここで取り上げられるのは『万葉集』巻一の巻頭歌、雄略天皇の歌である。この歌は天皇が野山で菜を摘む娘子に問いかけて自ら名告るという内容を持つものである。白川はこの歌を『詩経』小雅「采緑」などの草摘みと比較して捉えようとする。

この歌について天皇（大王）家直轄領で天皇への献菜に奉仕する族長子女の草摘みを歌の背景にするとした林屋辰三郎の論を取り上げ、次のようにいう。

雄略期から藤原期までには、二世紀にも及ぶながい伝承の時期を経ていたのである。その間に王権の推移消長、豪族勢力の盛衰交替などもあって、物語や物語歌の伝承にも影響する流動的な一面があったことを、考えなくてはならない。また歌謡の形式や表現についても、変更を受けるところがあったと推測される。

ここで、白川は万葉の雄略歌に至るまでの伝承、そしてその変容の可能性を想定する。したがって、白川はこの歌のみをみているのではなく、それを通してその原型となるようなものをも見つけているのである。

この歌の冒頭、「籠もよ み籠もち 掘申もよ み掘申もち この岳に 菜摘ます兒」について、「その草摘みの用具を歌いあげるのは、それが日常の草摘みごとではなく、改まった儀礼的意味をもつ行為として、なされていることを示す」とし、「そのような儀礼的行為としての草摘みには、敬語を用いるべきものであった」と述べるところは通説的見解と重なる。しかし、「家告らせ 名告らさね」（白川は「家聞かな」と訓む説に拠る）について、通説的見解では春の野遊び（歌垣。豊稷予祝儀礼とされる）での求愛と解釈されているのに対し、白川は「神事的なものとして行なわれている草摘みの場が、同時に妻問いの場であるということは」「やはりふさわしくないように思われる。」とする。そして、「この岡の草摘みに妻問いの場としての機会が与えられるとすれば、それはこの草摘みが魂振りのための予祝としてなされておおり、女がもの思う状態にあるときである。」と述べている。

白川は女性の草摘みについて、『詩経』中国の古代歌謡』の小雅「采緑」を論じるなかで次のように述べている。

時を定め、地を定めて、神に誓いをかけて摘む……草かごに採り盈たすことができないのは、神への誓いに叛くこと……摘み終えて、そのかごを道のほとりにおく……感染呪術的な効果を期待した魂振りとしての行為……

「五日を期と為す」とは、心に定めて、五日のうちにこれだけという誓いをして、草摘みをしているのである。それが予祝のためであることはいままでもない。しかし五日のうちにその草摘みを果た

しえず、六日になってもまだその予祝は成就しない。願いはすでに破れている。

白川は『詩経』詩篇にみえる草摘みを予祝的な神事行為と説き、この万葉歌の原型には同様の習俗が存したと想定しているように思われる。『詩経 中国の古代歌謡』には、

春の野にすみれ採みにと来し吾れそ野をなつかしみ一夜寝にける
(卷八・一四二四番歌、山部赤人)

明日よりは春菜採まむと標めし野に昨日も今日も雪は降りつつ

(卷八・一四二七番歌、山部赤人)

上野佐野の茎立折り生やしあれは待たむ多今年来ずとも(卷

十四・三四〇六番歌、東歌)

という万葉歌三首を取り上げ、

場所を定め、そこに標を結うて春菜を摘むのは、おそらく予祝のためであろう。昨日も今日も雪の降るのを歎くのは、「五日を期と為す」のように、予祝のためにその日も定めてあるからであろう。

……あおなを折りとって、年明けのまでも会う日を待とうと願い……草摘みは会うための予祝であり、また遠くにある思う人への魂振りとしての行為でもあった。……「春の野に」以下の歌は、従来そのようには解されていないものであるが、詩篇との比較を通じてその解を定めうるのである。

と説いている。

『初期万葉論』では、このような考え方をさらに展開させ、

万葉にみえる草摘み歌は、おおむね相聞に属するものである。そ

れは本来神事的なものであった氏族共同体時代の習俗が、その共同的紐帯の弛緩とともに、私的な予祝行為として行なわれるようになったものと解され、そのため草摘み歌には、「君がため」「妹がため」という発想をとることが多い。

と述べる。また、先の雄略天皇歌については、おそろくひそかに思う人のために魂振りとしての草摘みをする乙女に対して、よびかける戯弄の歌であろう。

としている。「戯弄の歌」とすることについては、本書で言及されていないが、『万葉集』卷十六・三七九一番歌(三八〇二番歌が春の野遊びを舞台とする、「竹取翁」と草を摘んで煮る九人の女子との戯れの贈答歌を念頭に置いてのことであろう。

この歌について、たとえば伊藤博『萬葉集全注 卷第一』(有斐閣、昭和五十八年(一九八三))が「冒頭歌は、雄略天皇を主人公とする原始的な歌劇の中で、大和の王者と土地の娘とが結ばれる春の国見歌として、身振りを伴って唄い継がれたものにちがいない。天皇と土地の豪族の娘との結婚は、その土地が王者に服属することを意味すると同時に、王者の統治する国土における五穀の豊穰を予祝する意味をも持つ。子孫の繁栄につながる結婚は、万物の豊かな生産を予祝する根源の行為として聖視された。」と述べるような理解の仕方とは大きく異なり、学界では賛同者を得にくい状況にある。しかし、この雄略天皇歌の論においてこそ、白川の比較文学的方法が最もよく示されているのである。

三 白川学における『万葉集』研究の意義

これまで白川の万葉集研究について述べてきたが、それでは白川学における『万葉集』研究の意義とは何であろうか。

白川が平成十一年（一九九九）、八十九歳の時に自らの人生を回顧して執筆した「私の履歴書」のなかで、『詩経』と『万葉集』について述べているところをたどってみたい。「詩経研究」と題する、昭和三十三年（一九五八）二月の立命館大学大学院博士課程東洋文学思想専攻設置に関わる部分である。新しく開設される博士課程の講座担当に際して、白川は詩経研究をまとめることとなった。それについて、次のように述べている。

『詩経』は世界で最も古い歌謡集であり、しかも民衆の生活、貴族社会の祭祀歌、またその政治的、社会的現実の感情をそのまま表現した、稀有の古代文学である。これに匹敵するものは時期的にはかなり下がるが、その古代的性格を同じうする『万葉』の他に、比肩すべきものはない。……その上『詩経』と『万葉』とは、同じく東アジアの古代に属している。この両者は比較文学の対象として、世界で最も古く、この上なく恰好の条件をもっている。

白川はその時、『詩経』と『万葉集』との比較研究を構想していたことが知られよう。白川にとって、『万葉集』の研究はこうした比較研究において欠くことのできぬものだったのである。思えば、若き日の万葉研究への思いを決して断念していたのではなかった。『立命館大学図書館蔵 白川静文庫目録』（立命館大学図書館、平成二十二年

（二〇一〇）をみると、昭和九年（一九三四）刊行の西村真次著『萬葉集の文化史的研究』増補改訂版（東京堂出版）、昭和十五年（一九四〇）刊行の北住敏夫著『萬葉の世界』教養文庫版（弘文堂書房）、昭和十六年（一九四一）刊行の高木市之助著『吉野の鮎 記紀萬葉雜攷』（岩波書店）、昭和十七年（一九四二）刊行の土屋文明著『旅人と憶良』（創元社）、昭和十八年（一九四三）刊行の『國歌の胎生及び発達』文化選書版（博文館）、正宗敦夫・森本治吉編『萬葉集大辭典』第一卷（日本古典全集刊行会）のような書名を拾うことができる。また、戦後の昭和二十八年（一九五三）から三十一年（一九五六）にかけて刊行された『萬葉集大成』全二十二卷、昭和三十一年（一九五六）に刊行された佐佐木信綱著『萬葉集辭典』（平凡社）の書名もみえる。白川は『万葉集』への関心を持ち続けて、これらの書物をその刊行後それほど遠くない時期に購入して通読し、『詩経』と『万葉集』との本格的な比較研究に向けて備えていたのであろう。

白川は、これに続けて「比較研究のためには、まずそれぞれの作品を徹底的に研究しなければならない。」と説いている。これは、たとえば『初期万葉論』において柿本人麻呂の安騎野遊獵歌を論じて三年前に刊行されていた『鑑賞日本古典文学』第三卷「万葉集」（角川書店、昭和五十一年（一九七六）所載の森朝男「柿本人麻呂の時間とその祭式」を引き、『楚辞』にみえる招魂儀礼を挙げて展開するところにみられよう。この書では大正十一年（一九二二）に刊行された土居光知著『文学序説』（岩波書店）や同十四年（一九二五）に刊行された島木赤彦著『萬葉集の鑑賞及び其批評』などのようなものから昭和

五十一年（一九七六）刊行の稲岡耕二著『萬葉表記論』（塙書房）や『鑑賞日本古典文学』第三卷「万葉集」など当時最新の研究書まで広くカバーされているのである。

さて、詩経研究についてであるが、当時の研究にはさまざまな問題が存していたことを述べて、次のようにいう。

私はそのような研究上の課題に注意しながら、従来詩篇について
の考察若干篇を発表してきたが、私の研究は大体五部に纏めるつもりであった。すなわち通論篇・民俗篇・解積篇・研究史篇・訳注篇である。それで大学院博士課程の開設に伴ない、修士課程に民俗篇・解積篇、博士課程に通論篇を充てることにした。かねて多少の用意があったことで、まず通論篇・解積篇の両篇を完成した。通論篇はA5判に組んで六百七十ページ、解積篇は四百五十ページである。
……

民俗篇は完成に至らず、そのうち発想法を問題とする「興の研究」を、同じく三百六十ページにまとめ、招来は各論教篇を加える予定であった。研究史篇は先秦を除いて未完、訳注篇は晩年に至って漸く刊行の運びとなり、平凡社の東洋文庫に『詩経国風』『詩経雅頌』（一・二）の三冊を収めた。

通論篇・解積篇を出したとき、京都大学の吉川幸次郎博士から、旧制による学位請求をしてはどうかという申し入れが、橋本先生を通じて伝えられ、私は先生に勧められて通論篇を主論文、解積篇を参考論文とすることを希望した。しかし通論篇は分量が多く、その頃書きあげたばかりの「興の研究」が適当量であるというので、そ

れを主論文、他を参考論文とすることになった。審査には小川環樹・重沢俊郎のお二人が参加された。

このようにしてまとめられ、博士学位請求論文として京都大学に提出されることになった「興の研究」は昭和三十五年（一九六〇）十一月、立命館大学文学部中国文学研究室から孔版で『興の研究（稿本詩経研究別冊）』として刊行されている。

詩の發想における古代的性格は、興とよばれているその發想形式のうちにも最も多く遺存しているとみられるが、起興の辭として諺的表現が多く用いられていることのうちには、諺がかつて呪的言語としての機能をもつものとして行われていた時代のあつたことを推定させるのである。

これについて、わが國の古文獻に見える諺の性格を参照することは、必ずしも無意味ではないと思われる。もとよりわが國で「こ」と「わぎ」とよばれるものが、中國の原初の諺とつねに同義であるとはいえないが、兩者の發生の形態と性質とに相似たところがあり、その比較は決して無意義でないと思われる。……

そういう觀念や習俗は、ひとり起興の辭にのみあるのではなく、詩の表現の全體を通じて存するのであるが、そのうち起興の辭として定式化した形式のものが、一般に興とよばれているものの實體である。それはある意味では、常陸風土記にいう諺から定式化した枕詞・序詞と相似たところがある。枕詞や序詞は後には殆んど形式化して、全く修飾語となつてしまつたが、枕詞・序詞も本来は單なる修飾語ではなく、それ自身の内包において被修飾語と

關わるところをもつものであった。土橋寛 枕詞の研究 立命館文学
一一・一一三號 興にもまたこれと同じく、前代の原始歌謡のも
つ呪言呪詞としての性格を繼承するところがあると考えられる。
(傍線は引用者による。)

白川はここで、『詩経』詩篇の表現形式である「興」を論じる上で
日本古代文学の「ことわざ」や枕詞・序詞と比較することの意義を述
べている。したがって、この時点で『万葉集』の歌などを具体的に取
り上げてその比較を論じる用意はできていたであろう。しかしながら、
この書において日本古代の文献が具体的に引用されているのは最初の
傍線部に続く文章において『常陸国風土記』の諺が引用され、折口信
夫の呪言・呪詞の論について述べた個所のみである。ここでは、これ
に関連する『古事記』『日本書紀』の該当個所がいくつか挙げられて
いるが、それ以外の個所においても『万葉集』の歌は一首も見出すこ
とができない。それは、

草摘みは單なる實際的勞働というべきものではなく、わが國の古
代歌謡においても顯著に認められるように、その行為自體がある民
俗の意味をもつものとして行われることが多いのである。そういう
民俗的事實について、異つた文化圏に存在する事実を安易に比較す
るということは、勿論なるべく避けるべきであると考えるので、こ
の研究においても他民族や他の文化圏、あるいは未開社會にみられ
る習俗との比較はあげないことにしているが、しかし他の區域で一
般的に行われている習俗の體系が、相似た體系をもつ詩篇の中に見
出されるといふような場合には、それが中國の古代社會においても

民俗として行われていたであろうという可能性を考えることは、許
されてよいであろう。そしてそれを詩篇に即して證することができ、
またそういう解釋が草摘みの興の全體に對して適用しうるものであ
るならば、中國の古代にその習俗がかつて存したことを信じてよい
と思われる。(傍線は引用者による。)

と述べるように、博士学位請求論文として刊行された研究書において、
古代中國の詩篇と時代や地域を異にする万葉歌を直接引用してその比
較について論じることには慎重で、折口や柳田國男、土橋寛らの説を
引用することによって論が進められている。そのことについての無用
な批判を避けたのであろう。だが、その論の背後には万葉歌が具体的
に考えられていたと推測される。その十年後に刊行された『詩経 中
國の古代歌謡』では万葉歌が随所に引用されている。白川の詩経研究
にとつて、『万葉集』は欠かせぬ資料であつたのである。

『詩経』詩篇と『万葉集』の歌との比較の方法の特徴はこの書にお
いて最もよく現れている。
たとえば、「揚之水三篇」である。

国風に「揚之水」という師が三篇ある。いずれも「揚れる水」と
いう歌い出しをもつ詩であるが、どういう意味の発想であるのかよ
く知られていない。

と述べ、それら三編の詩について解説した後、

これらの詩は、おそらく山柴を水に流して、ことの吉凶や成否を
占う水占みなうらの俗を示すものではないかと思われる。水占は、水にもの
を流して、岩にせかれるかどうかによって予占するもので、わが国

にもその俗がある。

として、万葉歌の

妹に逢はず久しくなりぬ饒石川清き瀬ごとに水占延へてな

(十七・四〇二八)

我妹子を夢に見え来と大和道の渡り瀬ごとに手向そ我がする

(十二・三二二八)

を挙げて、日本の古代に水占や川瀬の手向けの習俗があったことを述べる。そして、

おそらく水占の俗が中国の古代にもあって、これら揚之水の諸篇のような発想を生んだのであろう。

と結んでいる。

ここにみられるように、白川は『詩経』の詩篇それ単独ではわかりがたいことを『万葉集』の歌をも視野のうちに入れることで解こうとする。こうした方法は、先に挙げたような「それぞれの作品を徹底的に研究」しようとした白川だからこそ推し進めてゆくことが可能となるのである。その成果は詩経研究だけではなく、万葉研究においても寄与することであった。この万葉歌の「美奈宇良」（原文。訓は「みなうら」）はこの一例しかなく、「水占」と解されているのであるが、その具体的な方法などについてはよくわかっていない。下に続く「波倍」を「延へ」とみて、川に縄などを流して占うものかとするのであるが、こうした白川の論によって初めてその輪郭が浮かんでくることとなったのである。

白川は『詩経』と『万葉集』から中国古代と日本古代に共通する民

俗を明らかにし、そこから表現を解釈しようとする。この書のなかで、

『万葉』の研究が、従来の注釈学的、あるいは印象批評的な解釈から脱して、その発想の場を古代人の生活と心意のうちに追求し、その表現を一つの時代の様式としてとらえようとする民俗学的方法の導入によって、急速な展開をみせたように、詩篇の研究にもその方法の適用はきわめて有効であろう。私はこの書の中で、詩篇をそのような立場から新しく見直してみたいと思うのである。」と述べているが、この『万葉集』の研究の「民俗学的方法」とは折口信夫によるものであった。白川は、この書刊行三年後の昭和四十八年（一九七三）に刊行された論文「古代歌謡の世界―『詩経』と『万葉集』―」（『講座比較文学』第一巻「世界の中の日本文学」所収、東京大学出版会）では「もし『万葉民俗学』というべきものがありうるとすれば、詩篇にも『詩経民俗学』の領域を立てることができよう。」として「詩経民俗学」という用語を造語する。そして、さらに七年後の昭和五十五年（一九八〇）五月に講談社学術文庫として刊行された『中国古代の民俗』では全七章に終章を加えたもののうち、第四章の一章を「詩経民俗学」と題している。

『詩経』と『万葉集』を視野に入れて比較研究が進められることによって、白川学は壮大で格段に深い学問となっていたが、その研究方法においても『万葉集』はきわめて重要な役割を果たしたのである。

注

(1) 白川静「私の履歴書」（『白川静 回想九十年』平凡社、二〇〇〇年）

- (2) 注(1)に同じ。
- (3) 注(1)に同じ。
- (4) 注(1)に同じ。
- (5) 橋本達雄「空穂顕彰」(『まひる野』第四百五十二号、一九八二年九月、『大伴家持作品論攷』塙書房、一九八五年、所収)
- (6) 拙稿「立命館大学日本文学専攻・日本文学会年表」(『論究日本文学』第六十一号、一九九五年三月)
- (7) 白川静『詩経 中国の古代歌謡』(中央公論社、一九七〇年)
- (8) 佐佐木信綱『萬葉集古寫本攷』(竹柏会、一九一一年)
- (9) 『万葉集』全巻の注釈書として、井上通泰『万葉集新考』(歌文珍書保存会、一九一五年から一九二七年)、鴻巣盛広『万葉集全釈』(大倉広文堂、一九三〇年から一九三五年)が刊行されていた。
- (10) 白川静『後期万葉論』(中央公論社、一九九五年)
- (11) 伴信友「正卜考」

(元立命館大學文學部教授)